

## 英語教育「入門期アルファベットの指導」

記号研「掲示板」について下記のような投稿があったので思いついたことを以下に記して、その都度「掲示板」に載せてきました。

**ブクドゥ読み** 投稿者：新見明 投稿日：5月2日(日)

中学1年生の英語の導入にアルファベットを2時間やった後、やはりローマ字を教えている。へボン式を教えるだけでも大変な生徒が多い。

今年の新しい試みは、アブクド読みである。新英研の方法で覚えたが、それはアルファベットを短音の発音にそって練習するものである。

a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z  
アブクドゥエフグ ハイジュクルムヌ オ プクルストゥウ ヴウクスィーズ  
(エイ) (イー) (オ) (ア)

アブクドゥエフグ I am singing アブクドゥ

この新英研の方法をABCの歌に乗せて練習させる。ABCの歌テストの後、この替え歌を導入する。そして、1年生の導入段階であいさつ練習の次に後単語練習が行われるが、その時、このアブクドゥ読みを練習してみた。

単語練習ではよく知っている単語の場合は単語の発音練習のあと、アブクドゥ読みに分解する。catの場合「ク ア ト」のように読ませ「キャット」を類推させる。次に、難しい単語の場合逆にアブクドゥ読みから単語の発音を類推させることができる。fineの場合、「フ イ ヌ エ」「フィーネ」、すごいそれはドイツ語読みだね。他の読み方は?「フ アイ ネ」、bikeで習ったように英語の最後のeは読まないことが多かったでしょう。「フ アイ ン」「フ イン」 そうです。それが英語読みなんです。

このように私達が英語の発音を辞書を引かなくてもほぼ類推できるようになった過程をかなりはやく読めるようになると考えて実践しているところである。実践結果はまた報告します。参考文献「英語の授業アイデアブック」三友社

「アブクド読み」よりも、アルファベットの文字からどのようにして各音が出てくるのかを教えるのが大切ではないでしょうか。たとえば、「k(ケイ)」→[k]です。

またローマ字を教えるとき「へボン式」ではなく「日本式」から入るべきだと思います。さもないと生徒の負担が重くだけでなく日本語の特徴を教えることが出来ません。「日本式」を知っていれば「へボン式」への移行は容易です。英語への応用はその次の課題です。しかも非常に応用価値・利用価値の高いものだと思います。

新見先生の実践に刺激されて、これに関する論文を書いてみたくなりました。なるべく近いうちに機関紙で発表したいと思います。

上で「アブクド読み」の欠点について書きましたが、家人に読んでもらったら、「これだけでは何のことをいっているのか分からない」と言われてしまったので、若干の補足をします。

要するに、せっかくABCソングでアルファベットの名前を覚えたのに、それが英単語を読み発音するための知識として何の役にもたっていない、だからこそ「アブクド読み」という別の作業・暗記必要になるわけです。これが問題ではないかと思うのです。

そうではなく、「ケイ」[kei]というアルファベット名から子音[k]と母音[ei]を分離することを教えてやれば、その子音の発音は、たとえばkit[kit]という単語の発音にそのまま生かすことが出来ます。

また、そのような「子音+母音」(ka-ki-ku-ke-ko)の組み合わせが日本語の特徴をなしていること、それに対して「子音+母音+子音」(たとえばkitなど)が英語の単語の基本構造であることも教えてやる事が出来るわけです。

さらにまた、この原理でいけば、「catの場合「ク ア ト」のように読ませ「キャット」を類推させる。」と

いうのも問題が出てくることになります。というのは、C「スイ」というアルファベット名から「ク」という発音は直接に出てこないからです。むしろ出てくるのは cen-ter のような単語ではないでしょうか。ですから、cat という単語の読み方は、別の工夫や説明が必要になります。

このような話・説明をしていると、どんどん長くなることが、書いているうちに分かってきたので、諦めて「あとで論文のかたちで載せます」と書いたのです。

**アブクド読み** 投稿者：新見明 投稿日：5月16日(日)01時52分10秒

寺島先生、「アブクド読み」再論ありがとうございます。私なりにもう一度考えて見ました。

□ ローマ字の指導は「ヘボン式でなく日本語式から入るべきだ」という指摘はその通りだと思います。小学校で日本語式はやっているから、中学校では「ヘボン式で」という考えで教えていました。ところがこのヘボン式の指導がやかいで読む方はまあまあできるのですが、地名 や人名を書かせると多くの生徒がここで何度も間違えます。それに、まだ文字と音が一致しない生徒がクラスに何人かいます。これらを、じっくり教えるには、日本語式から入った方が抵抗は少ないと思います。

□ 「アブクド読み」よりも、アルファベットの文字からどのように各音が出てくるのかを教えるのが大切」という指摘は、まだ納得できません。「エイ、ビー、スィー・・・」からの類推で音がわかるのはかなりありますが、eは「イー」よりも「エ」と読む場合の方が多い。gはジー(ジュ)よりも「グ」のほうが圧倒的に多い。そして2通り、もしくは3通りの読み方をする文字も多い。a(エイ、ア)、c(ス、ク)、i(ア イ、イ)、n(ン、ヌ)、o(オウ、オ、ア)、s(ス、ズ)、u(ユ、ウ、ア)など。その別の読み方を教えるためにも「アブクド読み」は役に立つのではないかと。そして、bが「ビー」から「ブ」の音で使われることを引き出すためにもアブクド読みが役立つのではないのでしょうか。

□ 今中学1年生の英語の導入段階で単語を教えていて、今までだったらフラッシュカードで単語の丸暗記をさせていた。それを「アブクド読み」で1文字ずつ分解して練習することによって、私も気づかなかった文字と音の法則を見つけることができた。

たとえばBeckyという名前が出てくるが、「ブ エ ク ク イ」となり、「どおして『ク』が二つあるのだろう。」と質問すると、「詰まる音だ」と答えが返ってくる。同じようにsoccerも「ク ク」と重なる。これも「詰まる音」になっていることがわかる。

もうひとつrを「ル」で教えているが、Markの「ム ア ル ク」の「ル」が母音をのばす役目をしていることにも気づく。

最後のeがいつもサイレントであることも、単語を分解しているとすぐ気づくことでやっていて発見が多いのに驚く。

□ こうやって文字と音の法則を探して指導していると、フォニックスになっていきそうだが、まずはアブクド段階での表をまとめて生徒にプリントして練習させようと思っている。

問題は今後、ee, ea, al, ou, au など母音の組み合わせを教えるときに、あまりにも多くの法則が出てきて泥沼に陥りそうだが、まずは基本的な文字と音の関係だけでも理解させたいと思い実践している。

前回の説明では確かに納得いただけなかったかも知れません。しかし英単語の基本構造は、penなどを見れば分かるように、CVC(子音+母音+子音)ですから、まずこれを読めるようにすることが発音練習の出発点ではないでしょうか。

そこでせっかく覚えた日本語式ローマ字を利用したらどうかと思うのです。さもないと、せっかくローマ字を覚えた意味がありません。また逆にローマ字が出来ると読める単語の世界が一気に広がります。例えば「パピペポ」が「pa-pi-pu-pe-po」と書ければ、pat-pit-put-pet-pot という単語が一気に読めるようになるわけです。

このように日本語の基本構造(50音)がCV(子音+母音)から出来ていることを先ず教えてやって、その子音と母音を分離することを教えてやらないと、いつまでたっても、patを「pat-to」のように発音する習慣から抜け出せないことになります。

また、たとえば 50 音の「かきくけこ」が「ka-ki-ku-ke-ko」のように「子音 + 母音」で出来ているからこそ、韓国朝鮮語は、それを子音文字と + 母音文字の組み合わせで表現する新しい表記形式を発明し、漢字文化から脱却することが出来ました。しかし日本語では、「k+a」は、「か」という文字でしか表現できないので、実は 50 音が CV という構造になっていることを自覚することを難しくしています。

(韓国人の TOEFL テストの点数が良いのは、案外、こんなところに秘密があるのかも知れません。)

さて上記の mark ですが、「まみむめも」が「ma-mi-mu-me-mo」と読み書できれば、mat「マット」、met「メット」と読むことは簡単ですし、mar を「マル」または「マー」と読むのは難しいとは思えません。あとはそれに「ク」を付け加えるだけですから、mark は「マルク」または「マーク」となります。わざわざ「ムアルク」とする必要はありません。

同じことは Becky についても言えます。これは 2 音節語ですから、まず Beck-y と分けて発音することを生徒に教える必要があります。このように音節に分離した上で、Beck を「ベック」読ませることは、合わせ文字 ck を「ク」と発音することを教えるさえすれば、「ベ」をローマ字で「be」と読み書きできる生徒には、そんなに難しい作業だとは思えません。

ここまで来れば Becky を「ベック + イ」「ベッキィ」への飛躍は一足飛びで、わざわざ Becky を「ブ エク ク イ」とする必要はないように思います。ポイントは、Becky を Beck-y と分離できるかどうかということ、合わせ文字 ck を教えることでしょう。これが出来れば Jack の発音も実に簡単に出来るようになります。このようにローマ字を土台に CVC の単語をたくさん読めるようにしておくことが次の飛躍を造り出します。

ですから soccer も、soc-cer と分節できれば、「サッカー」と簡単に発音できるようになりますが、アルファベット「C」は呼び名の「スイ」を子音[s] + [i]と分離しても、[k]という発音が出てこないで、練習用単語としては高度なもので、基礎練習の単語としてはふさわしくないわけです。アルファベット「C」を使った単語の練習をするのであれば、center cen-ter「セン + ター」から出発すべきだと思います。

このように書いていくと、またどんどん長くなっていくので、今回はここで止めます。なお「アブクド読み」はロー文字(ラテン語)の系列である下記のイタリア語の読みをほとんどそのまま使っているように思いますが、イタリア語やスペイン語の基本型は CV で日本語と同じですから、イタリア語やスペイン語の単語を読む方が英単語を読むよりもはるかに易しいと言えます。

<イタリア語> 出典 <a href="#">ローマ字の基礎</a>	
A a ア	[ア]
B b ビ	[ブ]
C c チ	[ク][チ]
D d デイ	[ドウ]
E e エ	[エ]
F f エッフェ	[フ]
G g ジ	[グ][ジ]
H h アッカ	[無音]
I i イ	[イ]
(J j イルンゴ)	
(K k カツパ)	

L l エッレ	[ル]
M m エンメ	[ム]
N n エンネ	[ヌ]
O o オ	[オ]
P p ピ	[プ]
Q q ク	[ク]
R r エッレ	[ル]
S s エッセ	[ス][ズ]
T t テイ	[トゥ]
U u ウ	[ウ]
V v ヴウ, ヴィ	[ヴ]
(W w ドッピオ ヴウ)	
(X x イクス)	
(Y y イプスイロン)	
Z z ヴェータ	[ツ][ヅ]

しかし英語が読めるようになるためには、既に述べたように、英単語の基本構造である「CVC」に飛躍しなければならないのです。とはいえ、拙著『英語にとって音声とは何か』でも書いておいたように、英語でも多音節語はローマ字読みに戻りますから、多音節語の発音の方が本当は易しいのです。拙著『英語にとって音声とは何か』第 3 部を読み直していただければ幸いです。

中学一年生に教えていて思うこと 投稿者：小川 勇夫 投稿日：5月16日(日)19時15分26秒  
寺島先生の「アブクド読み」再考をよんで

今年是一年生担任ということもあって、一年生を教えています。そこで難しいなと思うことは、やはり英語の発音とスペルの関係です。新見先生もそうしたことから「アブクド読み」を試されていると思います。

さて、僕の場合は、ローマ字の学習とアルファベットの発音と文字の習得から始めます。アルファベットは大文字、小文字とも小テストを行って、それぞれ「3文字までの間違いなら合格」として約100名の生徒が、アルファベットを書けるようにしました。それでも、非常に低学力の生徒がいるので、もうその生徒は忘れていますが。

そのあと、教科書に入って行くわけですが、指導は授業中に単語を発音できるようにしてやり、あとは単語ノートに何度も書かせるという方法をとっています。単語の発音とスペルをできる限り初期からインプットし、そこから発音とスペルをマスターさせるというものです。

教科書のニューホライズンのユニット1に出てくる覚えたい語句は次の通りです。

good morning I am (p12)  
are you Ms. Mr. yes nice to meet too (p13)  
from America no not Canada (p14)  
excuse me your change oh my thank welcome (p15)

この中でアルファベットの名前読みの中に(そしてローマ字の中にも)発音のヒントが隠されている単語は次のとおりです。

good gはアルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもある音素  
dも同様

ooは「ウ」と教えるしかない。実際はコメントしていない。

morning moはローマ字読み、

r は発音しないとする

ni、n はローマ字読み

I アルファベットの名前読み

am aはローマ字読み

mはアルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもある音素

こうしてみるとアルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもないものは以下の単語で下線部の部分。

you ouで「ウー」 yはローマ字読みの中に音素として含まれている

are reは発音しない

to oは「ウ」

meet eeは「イー」

America Canada excuse cは[k] sは[z]

your ourは「ウア」

change chは「チィ」

thank 「サ」に近い音

welcome oは「ア」

こうしてみると、アルファベットの名前読みの中、そしてローマ字の中の音素として何となく認識できても、それ以外にもこれだけの文字とスペルの特別な関係が含まれている。また、これを事細かに説明することは、中学一年生には複雑だし、退屈でもある。t qただし簡単に触れてやることは可能であろう。

こうしたことを、とりあえず生徒に何度も書かせることによって、音とスペルの関係を大量にインプットしていこうというのが当面の僕の方法です。

新見先生、寺島先生の投稿を読んで今自分の足りない点を自覚して良い機会となりました。いろいろご意見ありましたら教えて下さい。

小川先生は上記で「アルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもないものは以下の単語で下線部の部分」として「you、are、to、meet、America、Canada、excuse、your、our、change、thank、welcome」をあげてい

ます。

こうしてみると、to、you、your、are、our、come、good など、日常的によく使う一音節の単語ほどローマ字読みに従わないことが分かります。

だから最初は英文に仮名ふりをして、とにかくリズム読みをしながら英語音声を楽しむことが大切なのです。そして語彙が一定量に達したときに「ローマ字読みをすれば如何にたくさんの量の単語が読めるか」を実践的に教えてやれば良いのではないのでしょうか。

その際、母音の合わせ文字「ou」「oo」などは「you、your、our」「good」を見れば分かるように、非常に難しいものですから、低学力の生徒のために、最後まで仮名ふりは残るかも知れません。しかし子音の合わせ文字「ch」「ck」「th」などはローマ字読みの時に一緒に教えれば、習得はそんなに難しくはないと考えます。

さ sa (tha)	し si (thi, ci)	す su (thu)	せ se (the, ce)	そ so (tho)
sand,	sink,	sute マガモの群れ	send,	soft,
thank	think		theft 窃盗	thong 革ひも
	ci-gar, ci-ne-ma		cent, cen-ter	
		su-per, Su-zanne	se-man-tics	so-lu-tion so-ci-ol-o-gy
		thu-li-a 酸化リウム	the-ra-py (ther-a-py)	

上記の表を見ていただければ、多音節語ほどローマ字読みで簡単に単語が読めることを確認できるはずですが、先に「拙著『英語にとって音声とは何か』第3部を読み直していただければ幸いです。」と書いておいた理由がここにあります。同じことを「か行」で示すと次のようになります。

か ka (cka, ca)	き ki (cki)	く ku (cku, cu)	け ke (cke)	こ ko (co, cko)
kabob 串焼き	kit	Kung Chiu 孔子	Kent(人名)	Kodak コダック
yacka つらい仕事	Vicki(Victoria の別称)	Baku バクー(都市名)	ack-er(俗)現金	beckon 手招きする
ka-lei-do-scope	ki-ne-sics 動作学	rock-u-men-ta-ry	Ken-tuck-y	Mekon メコン川
can		cube, cute, accuse		cop 警官, common

ここでも多音節語ほどローマ字読みで簡単に単語が読めることを確認できるはずですが、つまり、『英語にとって音声とは何か』第3部で書いておいたように、一見すると難しい単語ほど発音するのが易しいのです。いずれにしても、中学校の教科書に出てくる単語を使って、このような表を学年ごとに作ってみると、どれくらいローマ字読みで単語が読めるようになるかが確認できるはずですが、ぜひ試してみたいと思います。

ところで、小川報告では上記で「アルファベットの名前読みの中に、そしてローマ字の中にもないものは以下の単語で下線部の部分」として「you、are、to、meet、America、Canada、your、our、change、thank、welcome」があげられていたのですが、次のように考えれば、十分に読めるようになるのではないのでしょうか。

1) meet の「ee」は「イー」が二つ並んでいるので、「イー」と伸ばす。また末尾の「e」はその直前の母音を「アルファベットの名前読み」にする記号だと考えれば、「ee」は当然ながら「イー」と読むこととなります。

2) America、Canada は、上の表のように「か」が「ka」だけでなく、「ca」という場合があることも教えておけば、これらもローマ字読みそのものではないのでしょうか。

3) excuse は ex-cuse と分節すれば、「ex」を「エ(e)クス(x)」と読ませることは余り難しいとは考えられませんし、cuseの方は、末尾の「e」は直前の母音字を「アルファベットの名前読み」=「字名よみ」させる記号ですから、cuse は当然ながら「クユース」「キユース」と発音されることとなります。

「キユース」を「キユーズ」と発音させるためには、「s」は「ス」「ズ」の二通りの発音があることを教えておかなければならないのですが、これそのものは「無声音」「有声音」の転換だけですから、発音自体に難しさがあるとは思えません。

4) change ですが、「ちゃ」のローマ字を教えるときに、日本式「tya」に習熟させたあと、ヘボン式「cha」も

教えておけば、この単語を「チェインジ」と発音させることは何の困難もないように思えます。

というのは、末尾の「e」は「字名よみ」の記号ですから、その直前の母音字「a」は「エイ」となるからです。つまり「cha」は「チャ」ではなく「チェイ」となりますし、「n」は「ン」、「g」は「ジ(イ)」ですから、これらを合わせれば、「チェイ+ン+ジ」となります。

5)最後に welcome ですが、「わ wa」「うい wi」「うえ we」「うお wo」というローマ字が教えられていれば、wel を「ウエル」と読ませるのは難しくありません。

問題は come ですが、これは末尾の「e」を考慮に入れると、「ク k+オウ o+ム m(e)」 「コウム」となるはずですが、既に述べたように、身近な易しい単語ほど規則に従わないので、これは例外であり、「カム」と発音するのだと教える以外に仕方がないように思われます。

これは動詞の過去形でも同じで、身近な単語ほど不規則動詞になり、come - came; go - went などのように、語尾に「-ed」を付けるだけでは過去形になりません。つまり先にも述べたとおり、易しい単語ほど難しく、難しい単語は逆に難しいとも言えるわけです。

そこでお願いします。上記のようなローマ字 50 音の表を作り、中学校の教科書に出てくる単語でローマ字よみ出来るものをこの表に埋めていくと、どのようなものが出来るか、ぜひ試してみてください。それを学年ごとに作ってみると、どれくらいローマ字読みで単語が読めるようになるかが確認できるはずです。それを夏の研究集会で発表していただければ参加者も大いに得るものがあるのではないのでしょうか。